巻頭言

山口陽一

二〇一二年三月三十一日をもって東京基督神学校は閉校する。代わって四月一日には東京基督教大学大学院が設置され、神学校における教会教職の養成は、東京基督教大学教会教職課程（学部神学科三、四年次の教会教職専攻と大学院）に統合される。また教会音楽奉仕者の養成は大学の副専攻および専攻科において継承される。これに伴い神学校の紀要『基督神学』は、東京基督教大学紀要『キリストと世界』に統合されるため、『基督神学』は今回をもって終刊となる。ここでは神学校の六十二年六ヶ月を感謝をもって振り返り、最終号の掲載論文を簡潔に紹介する。

「神のことばとイエスのあかしとのゆえに」

黙示録一章九節

一九四九年十月十六日、杉並区堀ノ内に設立された東京基督神学校は、「開設の趣旨」に「一、神の栄光と福音宣伝のために、敬虔と奉仕と祈りの生活に専心し、この世と妥協せず、神の御言に忠実に従う伝道者を養成する。二、聖書をギリシャ語、ヘブル語の原語によって、その正確な意味を把握し解釈しうる伝道者を養成する」と謳った。理事長・渡辺連平、学監・長谷川真。一九五〇年に予科を併設、一九五一年には日本基督神学校と名称を変更、校長J・ヤング。翌年、小畑進ら三名が卒業し、堀ノ内時代十九年間の卒業生

は三十七人（平均二人）、予科の卒業生四十七人。

一九六六年、ヤング校長が退任、一九六八年には東久留米市氷川台へ移転した。一九六六年から七三年まで、小畑進、宇田進、A・P・ソルトー、堀越暢治が教授会議長を務め、一九七四年、同職に就任した丸山忠孝が一九八〇年から校長となり八五年に至る。一九八〇年に東京都の専修学校となり、東久留米時代十二年間の卒業生は六十二人（平均五人）。

一九八〇年、国立市に移転。東京キリスト教短期大学、共立女子聖書学院と合同し、東京キリスト教学園が設立された。翌年、校名が東京基督神学校に戻る。「3校の協力関係についての趣意書」は、戦後三十年を経た神学教育機関の分立を憂え、「いよいよ力を増し加えつつある世の挑戦に対抗しつつ、次の世代の教会の指導者を養成し、神の栄光をあらわしうるためにはこの歴史的な曲がり角にあたって広く福音主義神学教育機関が協力関係を樹立することが求められていると信じます」と表明した。同趣意書は「教会と神学教育機関とのあいだには、相互に深い理解・支援・奉仕の関係が成立していなければなりません」とし、現状の不十分さを認識しつつ次のように述べている。

「日本の福音主義教会は、その奉仕と指導にたずさわる教職の養成について謙虚に反省し、そのような不備を聖書的エキュメニズムの精神に立って、できるだけ早く是正するために、総力を結集しなければなりません。そして神学教育機関は、賜物の結集によって教職の養成とその継続教育、信徒の教育や訓練などのために、理論および実践上の教育内容をいっそう充実し、教会のわざにいよいよ深く参加できるように図らなければなりません。」

そして、「このことが、神の導きと助けにより、日本の福音主義教会と神学教育との将来にとって、一つの良いあかしとして用いられることを願ってやみません」と締めくくる。今日にまで至る学園の願いである。

国立時代は九年で卒業生は一〇六人（平均十二人）。

一九八六年、下川友也校長が就任、Asia Theological Association（ATA）の学位（M. Div.）授与資格を得る。一九八九年に千葉県印西市に移転、千葉県の専修学校となり、二〇〇〇年には音楽科が設置された。二〇〇四年に山口陽一が校長となり、二〇〇五年東京基督教大学共立研究所共立研修センターを神学校に移管し共立研修コースとする。在校生が過去最多の五十七名となった二〇〇九年、学園理事会（理事長赤江弘之）は神学校の東京基督教大学（学長倉沢正則）との統合を決定、翌年に学生募集停止、東京基督教大学への三年次編入が開始された。大学と神学校の統合は以前から検討していたが、図らずも東京基督教大学に対する大学基準協会の評価を契機に三校合同がめざした「新校」の実現となった。

その年、二〇〇九年の神学校は、神学科教職コース（三年課程　ATA・M. Div.）、神学科共立研修コース（二年課程　ATA・M. A.）、音楽科（三年課程　ATA・M. A.）を有し、教授会は、伊藤明生、宇内千晴、大竹海二、小林高徳、木内伸嘉、柴田敏彦、山口陽一、大和昌平、油井義昭、ランドル・ショート。講師は、朝岡勝、嵐時雄、池田勇人、伊藤僚、稲垣俊也、岩田三枝子、宇田進、岡村直樹、金煥、木森隆、倉沢正則、郷家一二三、櫻井國郎、清野勝男子、天田繋、内藤真奈、飛田喜功、広橋嘉信、丸山忠孝、松原洋満、三浦譲、水草修治、箕輪成美、山田泉、米沢陽子であった。

大学院設置にあたり、校長は研究科委員長（教会教職課程責任者）、大竹海二氏は教会音楽副専攻と専攻科（教会音楽専攻）主任となり、教務主任の柴田敏彦氏、宇内千晴氏は非常勤講師として働きを継続する。油井義昭氏は退任する。牧師と兼任で長年労された「神学校の恩人」と故小畑進師が評されたのはまことである。

印西時代二十三年間の卒業生は二八八人（平均十三人、内音楽科十五人）。六十二年半の間の本科卒業生

は四八一人、本科修了生一二人、予科卒業生四十七人、計五四〇人である。

『基督神学』最終号

丸山忠孝氏の講演「歴史の中で、歴史を越えて福音に生きる」は、東日本大震災を神の創造と節理の中にある歴史の節目と捉え、「神が」歴史に生きる私たちの痛みをどうご覧になり、語りかけておられるかという福音的視点から考える。キリスト者が「歴史の中で」、隣人の痛みを痛み、自分の十字架を負うべきこと、また「歴史を越えて福音に生きる」者は、終末を摂理の信仰により、摂理に抵抗する勢力との霊的闘争の中で、ディアスポラとして生きるよう語りかける。

朝岡勝氏の「ドイツ告白教会闘争と伝道者養成」は、ボンヘッファーの「共に生きる生活」、イーヴァントの「説教学講義」を通して、神学（教育）が、その本質として国家から独立する所以を説き、今日における神学の学びの心得を語る。

大和昌平氏の「不干斎ファビアン研究（4）」は、『破提宇子』におけるバテレン批判と神義論を検討し、黒住真の論を紹介しつつファビアンの信仰の本質を窺う。氏のファビアン研究の一応のまとめとされるが、ここからの深まりを予感させる論考である。

天田繋氏の「なぜ私は聖書カンタータを作曲したか」。バッハに触発され、日本人が日本語で歌うカンタータの作曲を思い立ってから三〇年、生み出された七つのカンタータは多くの人に親しまれ歌われつつある。その誕生秘話と込められた思い。是非ご一読を！

油井義昭氏の「イザヤ書6章の『頑な預言』とその展開」は、イザヤの召命記事に続く「頑な預言」の旧

約における広がりを確認し、新約における展開を探り、イエスと初代教会の伝道活動において、「頑な預言」が予型論的に成就したことを論じる。

齋藤五十三氏の「ハイデルベルク信仰問答　第一聖日の注解」では、「あなたの唯一の確かな慰めは」、「この確かな慰めの中で喜びいっぱいに生きそして死ぬために」との試訳が示され、全一二九問答の意図に照らしての丁寧な注解がなされている。

青木義紀氏の「ハイデルベルク信仰問答のミサ理解」は、この問答において異例とも言える論争的な第八〇問を一次資料に基づいて検討し、ミサ理解における誤解を認めた北米キリスト教改革派教会とカナダ・アメリカのカトリック司教団の協議の成果を紹介する。

宇内千晴氏の「音楽科チャペルの記録」。学園のチャペルは賛美の音楽表現の可能性を探る場でもある。五年間、十二回の音楽科チャペルの記録から、一度の礼拝に込められた思いの丈を知らされる。賛美の奉仕者がみことばの奉仕者に望むこと、切々と。

編集の労をとられた柴田敏彦氏、油井義昭氏と村山仁子職員の労に感謝いたします。

訂正

2ページ　7行目
【誤】　が設立された。
【正】　に統合された。

3ページ　13行目
【誤】　櫻井國郎　広橋嘉信
【正】　櫻井圀郎　廣橋嘉信

4ページ　1行目
【誤】　は四八一人、本科修了生一二人、予科卒業生四十七人、合計五四〇人である。
【正】　は四八〇人、本科修了生一二人、予科卒業生四十七人、合計五三九人である。